



足尾に行ってきた。涼しかった。「そうか、稼加つつ生きていけば快楽にすごせるのだ。」と気がついた。20代から場所にしがみついて生きてきた時代ははるかに過ぎていってしまったのだ。考えてみると、まあ、考えなくてもすぐわかるんだが、まとまった仕事は、なくなって久しいから、もはや、場所にこだわる必要はなかったのだ。そんな単純なことにすぐに気づかないというのはやっぱり頭がかたくなっていたんだろーね。そうでなければ、バングラへいったり、アフリカや、ベトナムの仕事をしたり、土木の仕事をやったり、絵本の

仕事をしたりなんてやってられなかったのだから。いまさら気がつくのがおそすぎるのだ。

そんな思いを抱いて、涼しいホームでわたらせ渓谷鉄道を待っていた、ようやく来た茶色のよたよた走る車両を見ると、運転士の肩越しに友人が見えて手を上げる。彼も気づいて手を上げたが運転士もなんだかかわからないながら手を上げる。「涼しいね。」とボックスに座る。彼は「後はビールを探すだけだね。」という返事。「酒でいい？」とくい飲みと酒を出して、にこやかに清流をさかのぼる旅が始まる。窓の外は、みどりの風が走って行き、流れが白く岩をかんでいる。「さて、どこ行こう？」そう、二人ともなーんも考えていないのだ。とりあえず、当面の目標とか、降りる駅くらいは決めないと落ちつかないだろうと、さっき乗り降り自由の切符を買ったときもらった地図を見る。鉄道はいよいよ渓谷の核心部にはいり、列車は止まるくらいのスピードで、ゆっくり清流を見られるようなサービスをしてくれて、杯がまた進む。

小さな駅でおりて線路沿いというより線路を歩いてもどり、懐かしきいい気分で博物館へ。Npo 法人の、みなさんボランティアでやっているところで、客が少なくヒマだったところにやってきた、ちょうどかっこうのヒマなカモおじさん二人にゆっくりじっくりと説明をしていただいた。話しながら一つ一つ聞いていたら、どうも、同類のにおいがして、聞いてみると、同じ会で一緒だったり、友人同士が良く知っていたり、館長さんもいっしょになって、ゆっくり話が出来る。実にいい時間が過ごせてよかったが、館内の喫茶にビールが無い。「なんでないの？」と聞くと、「こういう場所では、不謹慎だという意見も出たものですから。」という話でも、それじゃあ、じっくり含みや実りのある話や、いろいろな方面に広がっていく話が出来ないではないですか。」と意見を具申して、やむを得ずどこかに待っているはずのビールを求めてさまよい出す。

銅山を見たり、往を迷い、ロッキン電車このったりしてから夕刻、大田の呑竜楼にお参りして、駅前一杯やりつつ、店の親父さんの地元への批判や提言、その他その他を聞きながら彼がつぶやく「朝はまさかこんなところで、こんな風に飲むなんて予想もなかったねー。思いもかけなかった人たちとも会えてたくさん話を聞けたねー。」「まあ、いつもどおりです。たまには、少しは計画性ってもんがあっても…、親父さんお調子一本！」と時は過ぎていく。本当に私たちはどこにもむかっているんでしょーね。で、また酷暑の東京に戻ってきました。